

あなたがたの悲しみは喜びに変わる

ヨハネ福音書16章16-24節

【新改訳 2017】

- 16:16 しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなります。またしばらくすると、わたしを見ます。」
- 16:17 そこで、弟子たちのうちのある者たちは互いに言った。「しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見る』、また『わたしは父のもとに行くからだ』と言われるのは、どういふことなのだろうか。」
- 16:18 こうして、彼らは「しばらくすると、と言われるのは何のことだろうか。何を話しておられるのか私たちには分からない」と言った。
- 16:19 イエスは、彼らが何かを尋ねたがっているのに気づいて、彼らに言われた。「しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見る』と、わたしが言ったことについて、互いに論じ合っているのですか。」
- 16:20 まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜びます。あなたがたは悲しみます。しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。
- 16:21 女は子を産むとき、苦しみます。自分の時が来たからです。しかし、子を産んでしまうと、一人の人が世に生まれた喜びのために、その激しい痛みをもう覚えていません。
- 16:22 あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。
- 16:23 その日には、あなたがたはわたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしの名によって父に求めるものは何でも、父はあなたがたに与えてくださいます。
- 16:24 今まで、あなたがたは、わたしの名によって何も求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けます。あなたがたの喜びが満ちあふれるようになるためです。

【祈りながら考えよう】

- (1) 「あなたがたの悲しみは喜びに変わる」その時がいつなのか、3つの解釈を述べて下さい。
- (2) 3つの解釈のうち、決め手となるのは何ですか。
- (3) 主イエスの御名によって父に求めるものは、どうして与えられるのですか。その根拠は何ですか。

【解説】

(1) 弟子たちの混乱

しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなります。またしばらくすると、わたしを見ます。」
そこで、弟子たちのうちのある者たちは互いに言った。「しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見る』、また『わたしは父のもとに行くからだ』と言われるのは、どういふことなのだろうか。」こうして、彼らは「しばらくすると、と言われるのは何のことだろうか。何を話しておられるのか私たちには分からない」と言った。(16-18節)

主は弟子たちにこう言われた。「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなります。またしばらくすると、わたしを見ます。」このように主が語られると、主が語られたことの真意がよく分からず、弟子たちは混乱した。

混乱の理由は、10節で「わたしが父のもとに行き、あなたがたもはやわたしを見なくなるからです。」と言われたのに、今度は、「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなります。またしばらくすると、わたしを見ます。」と主が言われたからである。この2つの説明を弟子たちは調和させることができなかつた。

弟子たちはお互いに「しばらくすると、と主が言われるのは何のことだろうか。私たちには主の言われることがわからない」と尋ね合った。



(2) 3つの解釈

イエスは、彼らが何かを尋ねたがっているのに気づいて、彼らに言われた。「しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見る』と、わたしが言ったことについて、互いに論じ合っているのですか。まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜びます。あなたがたは悲しみます。しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。(19-20節)

主が意味しておられたことは、主は、あと何時間かの後、十字架につけられて殺される。その時、弟子たちは「泣き、嘆き悲しむ」そして、悪魔の支配下にあるこの「世は喜ぶのです」しかし、弟子たちの悲しみはやがて「喜び」に変わる。

この弟子たちの「悲しみが喜びに変わる」というのは、それがいつのことを指しているのか、3つの解釈がある。第1は、十字架上で死なれた主イエスが三日目に復活された時のことを指しているという解釈。第2は、主が聖霊として降臨された五旬節を指しているという解釈。

そして、第3は、主の再臨の時を指しているという解釈である。さらに、この3つのどれともとれるとする解釈もある。どの解釈も「悲しみ」は「喜びに変わる」からである。私たちはどの解釈をとればよいのか。

(3) 産みの苦しみ

この3つの解釈のどれを採用すればよいかは、これに続く主の御言葉によって決めることができる。主は、まず女が子を産む時のたとえを語られた。

「女は子を産むとき、苦しみます。自分の時が来たからです。しかし、子を産んでしまうと、一人の人が世に生まれた喜びのために、その激しい痛みをもう覚えていません。」(21節)

あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。(22節)

このたとえで主が言わんとしておられたことは、子を産むまで苦しんでいた人が、子の誕生と共に喜びに変わるということである。このようなたとえは、主の復活の時にも、五旬節の時にも、再臨の時にも当てはまる。そしてそのことは、それに続く22節の御言葉についても同じことが言える。

主が「しかし、わたしは再びあなたがたに会います」と言われた時とはいつのことなのか、主の復活の時なのか、五旬節の時なのか、あるいは主の再臨の時なのか。この3つのどの場合も、結果としてもたらされるものは、歓喜であり、奪われることのない「喜び」である。

(4) 求めなさい。そうすれば受けます

その日には、あなたがたはわたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしの名によって父に求めるものは何でも、父はあなたがたに与えてくださいます。今まで、あなたがたは、わたしの名によって何も求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けます。あなたがたの喜びが満ちあふれるようになるためです。(23-24節)

3つの解釈のうち、どれが妥当なのかは、この23-24節が決め手になる。この主の御言葉に一番良く当てはまるのは、五旬節の日であると思われる。

主の再臨の時に、私たちはなおも主の御名によって祈り求めなくても、直接主イエスとも父なる神とも話すことができる。そして、悲しみが喜びに変わるという場合、復活の主に出会ってもそうなるが、やがて主が昇天されると、弟子たちの喜びもまた失われてしまわないとも限らない。

しかし、五旬節の日以来、主が聖霊として来られ、私たちのうちに住んでくだされば、どんな時にも喜んでいられることができる。しかし、主は天におられるので、父なる神に祈り求める時には、主のお名前によって求めなければならない。

主が地上に生きておられた時には、弟子たちは質問や願い事があれば主のもとに来ていた。しかし、今日、主が天におられ、私たちのためにとりなしておられる。それで、私たちは、主のお名前によって祈り求める必要がある。

主イエスのゆえに私たちの願いは聞き届けられる。私たちがそれにふさわしいからではなく、主イエスがふさわしいお方であるからである。ここで弟子たちは、「求めなさい」と勧められている。祈りが答えられることによって、彼らの「喜び」は「満ち満ちたものとなる」のである。